

『わがふるさと となみ野』
12月号掲載原稿(末永智一先生)

「わがふるさと『となみ野』」
末永智一(まつえ ともかず)さん
東北大学大学院環境科学研究科・副研究科長 教授
宮城県在住
砺波市出身

現在ご活躍のとなみ野出身者に、故郷の思い出を語っていただく『わがふるさと となみ野』。

今回は、砺波市ご出身の末永智一さんにお聞きしました。

①現在はどうなお仕事をしていますか？

平成15年に設置された東北大学環境科学研究科(大学院)の副研究科長・教授、また工学部の化学・バイオ工学科教授を兼務しています。私の研究室では、私を含め8名のスタッフと20名ほどの大学院生および学部4年生が、環境や食品に含まれる有害な物質の検出や、ガン等の病気の早期診断が可能となる電子デバイスやシステムの開発を進めています。

また、日本の学術振興の中核支援機関である日本学術振興会のプログラムオフィサー(ナノ・マイクロ科学担当)として、各種研究機関に配分する科学研究費補助金等の審査・評価を行っています。さらに科学技術振興機構、新エネルギー・産業技術総合開発機構など公的機関の委員、各種学協会の理事なども務め、学内外の業務に忙殺される日々を送っています。

②故郷・砺波市にはどのような思い出がありますか？

砺波には、高校を卒業する18歳まで暮らしていました。小学4年生まで、自宅から歩いて10分ほどの小さな小学校に通学していました。春には、通学路が桜のトンネルになり、その下をくぐるようにランドセルを背負って歩いたこと、桜の花びらがひらひら落ちて雪のように感じたことを今でも鮮明に覚えています。その後は統合により出町小学校へ通うことになりました。子どもの足で歩くと通学にはかなり時間が掛かったと思いますが、道すがらトンボを捕まえたことや、野いちごや桑の実を食べた記憶があります。

実家は田んぼの真ん中にありますが、稲刈りが終わると広大な遊び場が出現します。そこで模型飛行機を飛ばしたり、凧揚げをしたり、野球をしたり…、暗くなるまで遊びまわっていました。現在実家には両親と弟が暮らしているので、毎年夏には家族を連れて帰省します。道や町並みはすっかり変わってしまいましたが、田園に浮かんだような山々、遠くに見える立山連峰の姿は昔のままで変わっていません。

③砺波市のご出身者として、誇りに思うこと(もの)はありますか？

故郷から遠く離れていますが、時々インターネットで富山県や砺波の情報を見えています。

また、テレビで砺波のことが話題になっていると、つい見入ってしまいます。

砺波地方には、ユニークでおいしい食べ物が沢山あります。私は名産である“大門素麺”、“かぶら寿し”、“かきやま”を贈答品として利用することが多いのですが、「大変おいしかった。どうやって入手できますか」と尋ねられることが度々あります。その時には、砺波のセールスマンよろしく、「きれいな空気とおいしい水があるから、何でもうまいんだ」と宣伝しています。

④今後の砺波市(となみ野)に期待されることはありますか？

私の専門ではありませんが、環境と調和したエココミュニティを目指す地方自治体の取り組みを見聞きする機会が多くあります。高齢化時代を迎え、環境に優しい循環型の地域設計をどのようになされるのか、私の故郷だけに非常に興味を持って見えています。

砺波地方には豊かな自然や水資源、農産物、そして隣近所で助け合う人間味が残っています。また“散居村”という、他に例のない住居形態があります。このような特色をうまく活かして、地産地消型で環境と調和した砺波独自の社会システムを作っていただければと願っています。ちょっと心配なのは、自家用車が無いと生活しづらくなっていることです。特にお年寄りの“足”をどのように確保するか、難しい課題です。

末永智一さん●プロフィール

昭和 29 年 1 月 砺波市大門生まれ

昭和 47 年 3 月 県立砺波高校卒業

昭和 51 年 3 月 東北大学薬学部卒業

昭和 56 年 3 月 東北大学大学院薬学研究科博士課程修了

昭和 57 年 9 月 米国ウイスクンシン大学博士研究員

昭和 61 年 3 月 東北大学工学部助手に就任(以後助教授)

平成 11 年 4 月 東北大学大学院工学研究科教授

平成 15 年 4 月 東北大学大学院環境科学研究科教授に就任(現在副研究科長)